

# 令和4年度文化芸術による子供育成推進事業－巡回公演事業－

## ワークショップ実施計画書

制作団体名	合同会社 大蔵流狂言山本事務所
公演団体名	大蔵流狂言 山本会

内容
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 狂言についてのお話</li><li>・ 狂言についてのクイズ</li><li>・ 狂言の基本所作（立居・歩く・走る）と発声体験。</li><li>・ 本公演で共演する際に謡う狂言小謡の稽古。</li></ul> <p>狂言は 650 年前に出来た「台詞」と「仕草」の対話劇です。現代のように照明も音響もなく、舞台道具も最低限のものしかなかった時代に、台詞と仕草のみで観客に背景を見せながら物語を展開していく狂言は、演者の表現力と発声の正確さ、そして何より観客の想像力が必要になります。狂言クイズでは、演者の表現と言葉を頼りに子供たちは想像力を働かせながら何をしているのか考え、答えを導き出し発表するアクティブラーニングを行います。体験では「型」と呼ばれる規則的な狂言所作を学び、礼節を身に付けます。</p>

タイムスケジュール（標準）
<p>【前半】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 狂言についてのお話（10分）</li><li>・ 狂言についてのクイズ（20分）</li><li>・ 立居（15分）</li></ul> <p>－休憩（10分）－</p> <p>【後半】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 歩く・走る（15分）</li><li>・ 発声（15分）</li><li>・ 狂言小謡の稽古（15分）</li></ul>

派遣者数
講師：3名（主たる指導者1名、他2名） スタッフ：1名

学校における事前指導
特になし。

令和4年度文化芸術による子供育成推進事業－巡回公演事業－

本公演実施計画書

制作団体名	合同会社 大蔵流狂言山本事務所
公演団体名	大蔵流狂言 山本会

演目
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 狂言「柿山伏（かきやまぶし）」「附子（ぶす）」</li><li>・ 小舞一番</li><li>・ お話「狂言の心と日本の文化」</li></ul> <p>（公演時間 100 分）</p>

派遣者数
演者：5～6名 スタッフ：1名 合計 6～7名

タイムスケジュール（標準）					
到着	仕込み	本公演	内休憩	撤去	退出
12時30分	12時30分～ 13時10分	13時30分～ 15時10分	10分	15時30分～ 16時10分	16時10分

実施校への協力依頼人員
楽屋の準備と舞台清掃をして下さる方。

## 演目解説

### ・「柿山伏」あらすじ

修行を終えて遠路故郷に帰る山伏は、空腹のあまり途中にある柿の木に登って実を食べます。

それを見つけ腹を立てた柿の木の持主は、山伏を散々にからかい、ついには山伏が柿の木から飛び降りるはめになります。

脚を痛めた山伏。こちらも怒って逆襲に出ますが。。

### ・「附子」あらすじ

貴重品の砂糖に近付かせぬため「附子」という毒だと偽って出かけた主人。

留守番の太郎冠者と次郎冠者はそれを怪しみ、決死の覚悟で「附子」に近付き、その正体を見破ります。

すっかり食べ尽してしまった二人は帰宅した主人にとんでもない言い訳をします。

### ・お話「狂言の心と日本の文化」

狂言を通して日本古来の物の考え方を解説します。

## 児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

本公演当日、狂言鑑賞とお話終了後に演者指導の下、ワークショップを行います。

初めに児童生徒は発声練習を兼ねて狂言の笑い方や泣き方を体験します。

大きい声が出るようになったら事前に行ったワークショップで覚えた狂言小謡のおさらいをします。

その後、児童生徒だけで狂言小謡を謡い、その謡に合わせて演者が舞います。

狂言小謡は簡単な謡なので、事前のワークショップに参加できなかった児童生徒も当日のワークショップで覚えることができ、共演することができます。

## 児童生徒とのふれあい

子供たちが謡う狂言小謡「蝸牛」に合わせて演者が舞うことによって、会場に一体感が生まれます。

この狂言小謡は650年前の子供たちが実際に謡っていた謡です。謡を通して過去に思いを馳せ、先人たちともふれあうことができます

蝸牛（でんでんむし）の謡は一度聴いたら耳に残る謡なので、実際に公演終了後も口ずさむ子供たちが数多くいます。自ら謡を謡うことで本公演後も持続的に狂言の世界にふれることができます。

一度忘れてしまっても、子供の頃に体験したことは潜在意識の中に残り、大人になって改めてふれた時に抵抗感なく狂言を受け入れることができます。子供たちに狂言は楽しいものと印象付けられるよう努めたいと思います。